和文讀本

稲垣千頴輯

巻一

375.9
In1
資料室

20484
教科書文庫
2
810
31-1885
200030
2158
M18
1885

資料室
395.9
In1
廣島文學圖書之印
廣島大學教
17662
図書

和文讀本緒言

上古ふ、いはゆる萬葉假字伊呂波等多りこそ有つ也。平假字いろは等多り片假字イロハ等などいふ物とてもなかりけれバ殊ふ意して其の詞を誤らせとゝもる歌ゐどがりこそ萬葉假字ふてを書きつ也。大方の文詞をバ萬葉假字して書りんハ徒ま字面ゝ長くあるがりへま字畫きへ多くて煩しゝ也バ爲ん方ゐくて不便ゐぶらふ漢文をのを用ゐく全く假字して書く事とてハあらぬ也つ也。中古平假字片假字といふ。

最便よきをの出來てより後ハ彼の不便ある漢字漢文をバ用ゐむ〳〵て事足るべきをゐ不世の人きき〳〵より讀み習ひ書き來る癖うせむ〳〵て字とゝいへた漢字文とゝいへバ漢文ゐて他ゐハ字ゐ文もなきやうゐ思ひて實事實學ゐつきゐの利害をだゐくも考へだたゞ漢字かき散し漢文讀をのゝしるをだけく才ある樣ゐ思ひとりて吾も人ゐ其の方ゐ學ゐのゐ心をいゐて先漢字つゐひゐらひ漢文ゐを習ゐ不どゐ許多の年月を過しをゞゝ筆

とるむゐりゐゐ也バむゞ鄰ゐけ氣良へしゐ
ゐ〳〵し知物の用ゐも考〳〵むゞかく志つゝ若き
壯の程をバ徒ゐ過し老て後ゐハ世間一般ゐ
ハ不通ゐ漢文をゐき人ゐハ煩多き漢字を教
ゐる事ゐのゐ力を費して世の爲國ゐ爲ゐハ
きせる益をも得せぐあらゐ生涯を盡をハゐ
べての學者ゐ弊ゐて いとも〳〵口惜し知事の
限ゐりゐの〳〵縱いゐむかり漢字をバよく識り
漢文をバ巧ゐゐくとも世ゐ之を讀むく解る
人少くバ何ゐゐハをん よ〳〵ゐむ人解る人多

くとも御國の人悉く唐土人あらねバなほ常ふ口ゐハ御國ぶゑ北語を使ひ御國ぬりの音を出さぞバ得有るべからぞをゝ口小ハ御國の語音戈用ゐて文ゐハ唐土北文を書ゐぞてハ得あらぞとならバ彼の韃人して齊語をゝへきするよりも拙き事ゐてなかゝゝ唐土人ゐる笑を生ぬ者きハ心ふも更ゐていつも文と語とも似をつゐぬものゐありてたゞ便ゐしきのみならび物學北方の甚じき害ゐさへゐりてすべく御國人の物學れもゝゝゝゝゝらぞ

はと至のたとゝゝゝ知ハ多くハこ也ゐよる事ゐて心ある者ハ深く慨ふべき事ゐるゐなほ多くゐ心づく學者ゐゐりしを此の二百年ゐゐり以來歌文の學漸く開りてよ至漢字漢文の不便ゐる事をさとりて私の著述ゐハ假字文をのゝ用ゐる人も多く出來ふけれどなほ公ざゐの文書ゐハ假字をバ用ゐきせ給ゑざりゝ也バ心ゐハあらぞ思ひゐぶらぜん方ゐくて時とゝてハ漢ゐきたる文をきかゝでも得あらざりしを今の大御代とありてより上

むかしこきや

天皇が詔旨の御書ある假字を交へさせ給ひ下ハ天ぎうる鄙の蝦夷の賤の子をまでもまづいろは五十音假字單語などいふものより教へ導りせ給ひて專御國語御國文を用ゐさせ給ふ事とおりあるハいともく尊く忝き大御惠ゆて御代の名ゆゑ明ゆ治る時ゆ生まあひたる人民ゆ上ゆき幸ゆて今よりして後ハえうゆき字學の煩もゆく語と文とハ似てもつゆゆやうかる違もなく吾ときどりよく

人ゆも教へよくなりて容易く實學實驗をもなし得つ蛍々世ハ世の爲人の爲ゆ甚しくて おのづゆら大御國の御光も添ふるゆゆれハ心ある學者の十歳の憾を全く此の大御代ゆ でゆくなるべき但しかくありとて今俄ゆ漢字をゆ用ゐて漢文をゆ讀むそといふゆハあらじ其の心して徒ゆ年月を過して實事實學をだゆ妨ぐる事ゆくハ心のまゝゆ漢文をも誦し 和漢詩をも歌ひねとぞよ

○真字してかける和文あり。祝詞宣命古事記等假字して

おける漢文あり。二十一代集の序等。然るに世の學者等。其體を分別せることを知らずして。平假字なるをこれ見るべ。即和文なりと心得て。近世の儒者等のかけるをきへる。誰ぞしの文くれかしの和文などいひて。ゆめのゝしる者の多きはいとゝ傍いとも知事にて。詮ずるに和文をばのつて知らぬあり。近世御國學の博士と世に世ゆるさるるきもの書るだに。ゆゑ漢文の癖の清くはりたるもいとゝ稀にて。僅に一人二人あるを。明暮漢字漢籍をのゝきたゝへる人等

の。いかでかうあくハ書得べきなるべ此の書。今の世の極めて初學の誦讀に爲にとて物しさるにて。あゝ〳〵ゆめでなくうるはしゝ。雅文ハ容易くきとゞ難き方もあるべ。或ハ軍記。或ハ俗物語などよりきへとゞまて。多き中にハ。御國文の體をらぬも。又詞のあやしくきとびたるるあるべ。ゆげに後世にならねばきをゝるおのづから雅びたる處ありて。其の方に罪ゆるきるゝこゝちせらるゝなり。ゆゑに文體の論。また文の解しやうなど。此細やうある事共も。

本朝文範の總論まいへきバ今ゑ儀ま一二を下ふいふべし。

○御國の語まハてにをはの係結といふそのあり。詞をあらべ調ふるあり今見やれからんためふ其のかゝり此詞ふハ□をあるしむすびるむ□をつく。

○└のあるしあるハいむゆる大段落。一も小段落なり。

○凡べて文ふハ意の急ある時ハかのづゝら語の省ゝれ約まること常ふありて初學の輩その省ゝきる語をあらぐハ詞づゝひのいふぞやかとぶき思ふこと多し。今かゝる處ふハ悉く傍ま片假字して、ゑと補ひ加へて示せりさきど中ふハ古と今と詞のつゝひさま異ふて今此世の俗語より思へバてゐをむ足もそーてをづゝなるやうふ思はるゝも古ふハ常ふくふのゝふ雅ふることあり。かゝる類ハ今そ此てまをは寔傍ふ補ひ加へたるもの、あきど多くハ漏しつ。

○軍記物語等ふ見えたる消息文ハ上下を省き

て用ある處のみを出したるが多くて全文ハいとゝまれなり但し東鑑よりとれる前後の地比詞あくてハ意のさとり難き事多しかゝる類ハその地比詞をも少しづゝのせたるして「」のたるしをして別てり

○軍記類其の他原ハ片假字してかけるも今ハ皆平假字ふ書きかへく引きたりさるハ片假字ハ何とあくこちなくかさくなし知を平假字もこよかくるだらふてなつろし知きまし

さまバなり又原ハ真字ばかりなりき所ど初學比輩のしるを迷ハしム誤るへく見ゆる處ハ多く假字を書き加へたり見ん人原書と字樣比異なるをゆいぶかしまを

目録

巻一
歴代　儀式　軍旅
巻二
地理　動植　言行　才藝
巻三

武勇　遊戯　俳諧　羇旅離別附
哀傷
巻四
評論附　説解附　教訓誡附　諫爭
勅書　院宣御請文　將軍家御教書
消息

廣島大學圖書之印

和文讀本巻一

稲垣千頴　輯

歴代

景行天皇の御世北段

中山忠親公

次のみかどは景行天皇と申しき。垂仁天皇の第三北御子。御母日葉酢媛命也。垂仁天皇の御世三十年正月甲子日東宮ゐ立給ふ。ちゝみかどふたりの御子ゐ申し給ふゆゑ。おのゝ心ゝ何をか得ん

と思ふとのたまふ。兄のみこ、弟ハ弓矢なんほしく侍ると申し給ふ。弟のみこ、兄ハ皇位をあん得んと思ふと申し給ふ。この言ま従ひて、のかみの御子ま、ハ弓矢を奉り、弟の御子をバ東宮ま立て奉り給へりしなり。辛未のとし七月十一日位ふつき給ふ。御年八十四世をたもち給ふ事六十年あり。五十一年と申しくま内宴行ひ給ひしま成務天皇のいまどみこと申しくと武内こそ其の座ま參り給もぞりしのむみのど尋ね

○辛未、即ち主上崩ぜ給ひ
九十九年ブリナリ
○位ま継ぎ給ふ事ハ
○皇太子ハ、即ち
○成務天皇ハ、即ち
○内宴ハ、内輪ノ宴ナリ

きせ給ひしま申したまへく、人々のみな御あそびのあひだ心を用ゐぶ者きをりなり。其の時もしひまあうぐふ心あるをれを侍らんなと思むく門を固めてなん侍ると申給ひしのむみらといふくあしびあく寵ト給ひ。武内ハ孝元天皇のむまどなり。此の後代々此帝の御うしろみとして世ま久しくかもしき。今ま八幡の御傍ま近くいたくきたまへるハ此の人ぞいまし。五十八年二月ま近江の穴穂宮ふうつりるき。

○仲哀天皇ハ、即ち第十四代ノ帝ナリ

後三條院天皇の御世の段

北畠親房公

第七十一代三十八世後三條院諱ハ尊仁後朱雀第二の子御母ハ中宮禎子内親王陽明門院と申す三條院の皇女なり朱雀の御素意ふかく太弟を立給ひき又三條の御末をも受給へり昔もかゝるためしゝ侍りき兩流の内外を受給ひて繼體の主となるまゝしくき戊申のとし即位己酉ふ改元此の天皇東宮ふを久しくおもゝまゝけるを

和漢の文顯密のをしへまゝくもゝとりからをあらせ給ふ詩歌の御製もあまたの人乃口ふ侍るめり後冷泉の末ざま世の中ゆれて民間の憂わきき四月より位る居給ひしをいまだ秋のをさめふる及ぶぬふ世の中のなりゆけるに有德の君るくまゝしくゝるとぞ申傳へ侍る始めて記錄所といふ所をおのをて國々の衰へゝるまゝをなほしきき延喜天曆よりこなゝふれまゝをおかしこ知御事ありけんゝ天下を治め給ふこと

四年太子ハ譲りて尊號あり後ハ出家せらゝ給ふ此の御時よりぞ執柄の權おきへらゝて君ハ御みづから政をきゝ給ふ事なかへり侍るゝ[illegible]はゝと其の頃まぐも讓國の後院中ハて政務ありとゝ見えゝ四十歳あまりましき

高倉院天皇の御世ハ段 神皇正統記

北畠親房公

第八十代第四十三世高倉院諱ハ憲仁後白河第五の御子御母ハ皇后平滋子建春門院 贈左大臣時信の女なり戊子のとゝ即位己丑ハ改元止皇政をきゝ給ふ事ゝとの如し清盛權を專ゝ事ハあゝさゝよ此の御代の事なり其ハ女德子入内して女御ゝを即立后あり末つ方ハやう所々反亂の聞あり清盛一家ハ世ざ天意ゝそむきけるゝことを嫡子内大臣重盛ハ心ざんさゝくして父の惡行おゝどゝを諫めけるさへ世を早くしぬ彌おぼりを極め權をわしゝ給まゝあゝ時の執柄ハて善提院關白基房の大臣あゝせしゝを

中らひ宜しからぬ事ありて太宰權帥ふ遷して配流せらる妙音院師長大臣も京中を出さる其のかのよ罪せらるゝ人おかのうき一從三位源頼政といひし者院の御子以仁王とて元服ハありしかと親王の宣なとなふなくてかさもゝあらぬ宮なおもせ一をすゝめ申して國々ふある源氏の武士等ふ相ふ出て平氏を失ちんと謀をなり事あらはれて皇子も失ちをぬ頼政も亡ひぬかの出とそれより亂出をめさるり一義朝朝臣ゲ子

頼朝前右兵衛佐從五位下平治のころハ位の藏人なりしゲ信頼事をおあしなる時任官ゑ平治の亂ふ死罪を申宥むる人ありて伊豆國ふ配流せらるゝ出て多くの年をおくりしゲ以仁王の密旨を承る院よりも忍びく仰遣を道ありなれバ東國をもゝめて義兵を起しぬ一清盛彌惡行をのみなしなるをゑ主上深く歎ゐ給ふ給ふ遜位の事あるをしを世を厭ゐ給ふけるゆゑと天下を治め給ふと十二年世の中の御いのりる知平家のあゝめ申を神なれゑ安藝ゑ嚴島

ふおん參らせ給ひゆる此のみろど御心えんもめでたく孝行の御あくろざし深ありき管絃の方ももぐ世をおもしまし〳〵り尊卿ありて程なく世を早くもくまふ二十一歳おまし〳〵ま〳〵ぬ

承久三年の條 增鏡

一條冬良公

承久三年ありぬ四月廿日みかどありさせ給ふ春宮四ゆ〳〵せ給ふゆづり申させ給ふ近頃みな此の御齡ふく受禪ありなるべきにはあれも

めぐたき御求あ〳〵んのし同日三日今ありさせ給へる新院と聞かせ給ひ御兄の院をば中院と申し父みのどをば本院とぞ聞えさせる

この程ハ家實北おとゝぐ（普賢寺殿の御子）關白ホくおえしつゝど御讓位の時左大臣道家の大臣（光明峯寺殿）攝政ホあり給ふ彼北東の若君乃御父なり（鎌倉）さてもおぼ

し構ふる事忍ふとそれどやう〳〵洩聞えさひ〳〵ざまふる其の心づのひをふめり東の代官ホて伊賀判官光季といふ者あり

御こうしのよし仰らるれバ御方ハ姿るつゝ兵記
のどゝ押寄せたるホのゝ方ゝ聲きゝうなゝき腹
きりくゝ星まつゆとめでたきとゝ院ハおがし
めりるあゝまあゝいみとうおもゝ騒ぐ略
元弘二年隱岐の皇居北條太平記

北小路玄慧等作

三月廿六日と申ゝホ御船隱岐國ホ著きホけり。
佐々木隱岐判官貞清府島といふ所ホ黑木の御
所を造りて皇居ゝゝ玉袞ホ咫尺しゝ召使せけ

る人ゝゝハ六條少將忠顯頭大夫行房女房ホハ
三位御局ゝゝのりあ星昔の玉樓金殿ホひきこの
ゝうきゝ〜ゝゝ竹だる紀淚隙なき松のこの爰
一夜を明ぐつる程もたへ忍ぶ聲き御らゝあら
ゝ鷄人曉を唱へ〜聲警固の武士ハ番を催ゝ聲
ゝこのり御枕の上ホ近々ゝ寄バ夜ハ御殿おしぐホ入ら
せ給ひても露まぐろホせ給ゝゝ萩の戸乃明る
を待ち〜朝政なけゝどゝ巫山の雲雨御夢ゝ入
る時も誠ホ曉ごとの御勤北辰ハ御拜も怠らゝ

ことゝいこのなる年なまを百官罪あうして愁ひ涙を配所の月ゐ[滴]ちたて一人位をこへ宸襟を他郷の風まなやゝ給ふらん天地開闢ありまのうこかゝる幽くきをきこのずさまを天まかゝる日月も誰が爲ゐり明なることを耻おざらん心あき草木も是を悲ゝく花さく事を忘まつべし」

建武元年大内裏造營の條 太平記

北小路玄慧等作

聖年正月十二日諸卿議奏して曰帝王の業萬機事おげくして百司位をまうく今の鳳闕僅る方四町の内ゐまバ分内狹くして禮儀ともの所ゐしとく四方へ一町づゝ廣げらまを殿をたて宮を造らる是ゐ古の皇居ゐ及ねバとて大内裏をつくらるべしとく安藝周防を料國まよせゝまを日本國の地頭御家人の所領の得分ゐ二十分一をかけめさる抑大内裏と申をハ秦の始皇帝の都咸陽宮の一殿をうつして造らまたれを南北三十六町東西二十町のゐの龍尾のまを置

石をもあく四方ゐ十二の門をたてらをたり東ゐハやうめい待賢いうもう門南ゐハ美福朱雀くもうかもん西ゐもだつてん きうへき殷富門北ゐハ安嘉ゐゐん だつちをんこの外上東上西の二門ゐいたるゆすぐ交戟衛伍を守りて長時ゐ非常をいましめらり三十六の後宮ゐハ三千の淑女よそほひをこのぐ至七十二の前殿ゐハ文武の百司みことのりをまつ紫宸殿の東西ゐ清涼殿こうゐんめいでん北ゐ常りて常寧殿じやうくねいでん

○文戟衛伍ト門ニ近衛ヲカ書ヲスヒヨカフ

○後宮ト皇后ノ居ル所ノ女官ノ居ル所ナリ

○淑女ト善キ女ヲヨカフ

ん殿貞観でんと申をハきさいまちの北のみくしげどの也けうしよでんと號せしハ清涼殿の南のゆもどのなすり昭陽舎ハなしつゐ右げい右やも桐壺ひきやう舎ハ藤つゐ凝花舎ハ梅つゐ右襲芳舎と申をもかんおりのつゐ北事あり萩の戸陣の座瀧口の戸島のぐうしぬひどの兵衛の陣左ハ宣陽門右ハ陰明門日華月華北両門ハ陣北座の左右ゐ對へり大極殿こあどの蒼龍樓白虎樓ふらくゐん清暑堂ごせちのえんをゐざい

○陣座ト云ハ近衛ヲ近衛ノ長官ノ長ナリ

○陣ト云ハ兵衛ヲ兵衛ノ長官ノ長ナリ

○清涼殿ト即チ正殿ナリ

じゆうゐんハあの所ゐて行ゐる中和院ゑ中の院
内教坊ハ雅樂所ゐりみくゐハ真言院ちんごゐ
じゐハ神嘉殿ゐ弓ゐゐ殿ゐ馬をバ武德殿ゐ御
覽ぜゐる朝堂院と申せハ八省院の諸寮是ゐり
右近の陣ゑ橘え昔をゑのぶ香をゐゐめみゐ
よしゐる竹の臺いくよゑ霜をかさゐらん在原
中將ゑ弓やなぐひ殘身ゐをへくこのみゐりさを
くよゐゐをゐゐあをゐゐなる屋ゐ居ゐをゐしハ官の
廳のちのしんでん光源氏の大將ゑしく物もゐ

しと詠ゐつゐ朧月夜ゐあゐおぼゐてハおきてん
の細どゑ江相公のいゐしへ越の國へ下ゐしゐ
旅ゑ別を悲しゐゐく後會期遙濡纓於鴻臚之曉淚
と長篇の序ゐかきゐゐしハ羅城ゑんの南ゐる
鴻臚館ゑなごりゐり鬼の間ちゐくゐ鈴の繩荒
海ゑ障子をバ清涼殿ゐたてゐるけんゐゐうの
障子をゑ紫宸殿ゐぞたてゐ出ゐる東ゑ一の間
ゐハ馬周房玄齡杜如晦魏徵二の間ゐハ諸葛亮
蘧伯玉張子房第五倫三の間ゐハ管仲鄧禹子產

蕭何四の間ふを伊尹傅説太公望仲山甫西の一
は間ふを李勣虞世南杜預張華二の間ふハ羊祜
揚雄陳寔班固三の間ふハ植榮鄭玄蘇武倪寛四
のまふハ董仲舒文翁賈誼叔孫通あり畫圖ハ金
岡ゲ筆贊の詞ハ小野道風ゲあ如たりるとそ
承る鳳のいらこのハ天ゑこのけり虹のうつぼり雲ゑ
そびえさしもいみしく造り雙べらゑ大内裏
天災を消もゑ便あく回禄たひくゑおよびて今
ハ昔の礎のゑ殘ゑり 下略

儀式

朝賀 公事根源 正月元日

一條兼良公

是を朝拜とも申ゑあり辰の時ゑ天皇大極殿ゑ
行幸なりて行ゑせたまふあ望羣臣みゑ禮服を
著して さゑごのゝ御即位の儀式ふゑあゝ内辨ゑ
どもあ望開門などありてめしのつゞみをうゝ
しむれバ羣臣列しゝく門ゑ入る天子高御座ゑつ

大極殿ハ省院の正殿ふて、重き儀式ハ省此処ゑ行なゝ内辨ゝハ儀式の時門内ゝ於て諸事を指備もう人をいゝて大極殿の南門ゝ門ハ朱雀門ゝ門ゑ辺鉦をうつゑ朱雀門の左右の陣る鼓吹騎兵等を列しゝ

このせたまへむ兵庫寮鉦をうつ執翳出ぐし帳を八字にかゝぐ近仗けいひつをあようし圖書主殿香をたく典儀再拜をとなふ羣臣おの時再拜いを奏賀奏瑞とく二人の宮北庭にすゝみて祝ひまうすことなりおの宮は去年北めぐたる事ぞものあるを國々より申せばそれを記して今日おの宮を奏するあり北時羣臣再拜をつぎに舞蹈をれを武官萬歲の旗をふるあり」いとめぐたき儀式とぞあり」神武天皇元年正月一日橿原の宮をたゝてめぐ位につこのせたまひける時宇摩志麻治命天瑞を奉らるしより日本紀に見えさりこ事なるをや始とも申すべき又孝德天皇の御宇大化二年正月一日御かとをぐこのこと

朝拜

たべるよりしかなゞ書にのせたりおの宮そのこと北朝拜とハ申せ宮のゝ北にこのるゐ六十六代一條院正曆より後ハおの宮とうけたまはりしだに記錄ゐも所見なきゐやいふしへハ大極殿もありしこのむあり今ハ小朝拜をこのりまぞゐ宮に

近仗ハ近衛の次將をいひ典儀ハゆ納言をいひ

香ハ淺香黃蘗香木香等をいふ

舞蹈まさに舞踏ともいふ再拜して笏を置き立て袖を左右に擺て拜をなすこと

右左ゐ也を取て小拜一立ゴアリ又再拜をもなり

天瑞ハ上古の瑞祥なり

橿原宮大和葛城郡

○神武天皇紀

春日社ハ大和国添上郡春日山にあり藤原氏の祖天児屋命建御雷神経津主命比賣神の四神を祭る

内侍ハ内侍の女官なり

府の官人ハ近衛府の将監将曾府生などをいふ

無名門ハ清涼殿の南にあり

春日祭 建武年中行事 二月の條

後醍醐天皇御製

北畠親房公修撰

上のひつゝ[本]に日春日祭の使たつ[発]近衛の中少将こまをつとむ昔ハ賀茂の祭におとらず今ハ近衛北隨身[ずいじん]おとゝの[殿]をこの[此]ぞ見ゆめる府の官人[官]そりむ[裃]ろまきて[着]舞人をつとむ賀茂のまつりにおとらず使無名門のまへ[前]まゐりて事乃よし[由]を奏[そう]す舞人をのゝ[物]わかのゝ[若]ひ[日]藏人[くらうど]ゝ[殿]藏のうまき[馬]ひ[日]くだり[下]たまふ[給]申の日[日]殿内侍[ないし]むこの[向]ゝ藏人[くらうど]車を奉る瀧口[たきぐち]ゝまきぶ[武]ゝ公卿[くぎやう]ゝもゝ[百]ゝそむ[衣]ふめる[踏]

更衣 建武年中行事

後醍醐天皇御製

北畠親房公修撰

四月つゝ[月]ゝち[日]御更衣なをバ[直]ゝ[衣]ゝ[衣]ゝ[衣

ふんあく繪をかく。こうべ（頭代）しろ皆徹を夜のふしぐ（物）も同ト燈籠の綱同ト物なれども新しき（モ）を。なく（モ）みと同ト（モ）ゐとねかもとゝ（樽）御ふく（服）ハ御ゆ（直衣）。御そ（衣）まくしの綾れ御ゐ（単）へ御（衣）ゆ（浴）はのま（単）内藏寮ゆを是を奉る女房のゆ（衣）ぬ（単）あんせの衣ぬ（単）も。衣（単）ぬれひ（単）ん（単）うゆきぬ（袖）すゞしも常の如し」

一條兼良公

是を書き式ある事ハまゝとも殿上の遊遊

○徹ヲトヽル　女房ハ四月中ハあはせきる也　女房ハ四月中ハあはせきる也　○あをばちトハ　○遊ビ

とて殿上人とも遊びく。嵯峨なとへむかひて虫を籠ゆえ〳〵び入れて奉る」是ハ堀河院の御ときよりなとゞまる。あゆよそ松むし鈴むし。あをゝ誰人と内裏ゆ奉る。又賀茂社の社司などゆ仰られく。めさをくるとゝ」

軍旅

源頼信平忠恒を世ゆるゝこと　中治拾遺物語

源隆國卿

昔河内守頼信上野守にてありし時坂東に平忠恒といふつはものありき仰せらるゝ事あきがごとくにおもる討うちんしたく多くの軍をおこして彼がすまかの方へ行向ふに入海に遥にはしり入りたるあるひに家を作りて居たり其海をまもるものあるべし七八日にめぐる多くしたがひ渡らむ其の日北中に攻めつ多くあるべ忠恒渡りの舟どもを皆取隠してけり渡れば渡るべきやうもあり濱づたにはうち立ちて其の濱北まで廻めぐ

まんべきおこそあるべと兵ども思ひたるに上野守の心ふかうこの海北まで廻りてあるべし日頃へぬ其の間にやがてまた寄せしるべぬるまんもせしるべあんけの中にはよせて攻めんこそあの奴つも存外今日まじそおもへどもそんずれ然るに舟ども皆取隠したるいかでもすべきと軍どをまとめてとるに軍さしるる渡し給ふ事なかうなり廻りてこそはあるべき給ふべく候ものと申しければあの軍どもの中にうるさしるこれ道

ありたる者ハあるべき。頼信ハ坂東をこの度ハ
を始めて見きれども我ガ家のつくゝ聞
置きたる事あり。奥北海の中ハ堤のやうにて
廣一丈ばかりにて。まぐまとりたる道あるな
り。深ハ馬のふとむなかまたるときく。此の程ハこ
を我の道を當りたるらめ。さうをまゐ多くの
軍どもの中ハ。をるもあるべし。はしゐ先ハ
をを渡せ。頼信つゞきて渡さんとて。馬をうき
ゝめてよせたる。知りたる者ハやあらん。

四五騎ばかり。馬を海ハ入れあらしたるに。
ハ渡りなれバ。をまをつゞき。五六百騎はかりの
軍ども渡しけり。おとゝ馬の大腹ハ。をちて渡
る。多くの兵どもの中ハ。三人ばかりのみぞこの
道ハ。あらはれける。殘ハ露もあらぬぞ。聞く
事だにもなかりけ。然るに。これかうじめ。ハの
國をば。こゝをあそ始ふ。我ハこゝ
北重代の者共ハ。あるべき。だにもせ。
ぬ。このゝ給へるハ。げに人ハ勝ぬ。

の、道ゝあをさく（松語）やきあぢく（渡）り給ふ程よ忠恒ハ海を廻りてそよせ給ちんぜとん（舟）ハ取隱しをれバ淺道をバ只我なをのりこそ知ぬ直ゐハ得渡り給ぬ濱を廻り給ちんあひさゐもしくゐくもし処もしてんさうゐくも得攻め給ハゞと思ひて心靜よ軍（戰）揃へて居たるゐ家のめぐりある郎等あゐく走り来て云く上野殿ハこの海の中ゐ淺き道の候ひたるより多くの軍を引具して已ゐ（果）ゐくへ来給ひぬいそぐ（急）せ給ひんと日ゐくゐき聲よあゐて〳〵いひけるバ忠恒（豫）ねくの仕度ゐ違ひて我もでる攻らせあんぜかやうよ仕立奉らんと云ひく忽よみゐうぶを書きく（文）ふをむきうみゐ（狀）を挾をきく上げて小舟ゐ郎等一人のせて持せく迎へて參らせたりけるを守殿見て彼此名簿（名簿）を受取らせく云くかやうゐ名簿よおゐくりぶを（狀）を添へて出もでゐきくゐるありされバあるのちよ攻むべきゐ非（ナ）しとてゐの文を取りて馬を引返しけるバ軍ども皆

歸りけり。其の後より、いよ〳〵守殿をば、殊か勝せていみじたる人なりまさんといよ〳〵ぬる給ひけり」

陸奥國十二年の合戰の時、義家貞任ゝ連歌 古今著聞集

橘成季

伊豫守源頼義朝臣、貞任・宗任等をせめらるゝあひだ、みちのくぶ十二年北春秋をあらため、雪ふりて、軍を(陸奥)(発)

のをのことゝもの、よろひ皆ちりたへかゝりまけ(鎧)(白)(拷)

て、衣河の館岸高く、川あり。ゆきむ楯をいたゞきてかぶとをかたぬいでをくみくせめ戰ふ。(脇鑒)(筏)

貞任いたはりをしをつひに城のうしろよりのゞきあちゝる。一男八幡太郎義家、衣河にをひ、ゆ(後)(後)(堤)

せをふきくだきたるおくもうしろを見ぬるをのゝ(後)

ふちをひき引うへせ、物いはんとゝいへをたりけれ

ば、貞任見かへりたまゝゝ

衣ゝたてはころびにけり。(綻)

○和文讀本卷一　十八

とりへ〻けり。貞任くつをぬ(緒)をやすらへ(休)ん。あこころ(鎧)をふりわけく。

年をへし糸のみだれをけふ〻るしさわ

とつけたりける。その時義家(若)をげたる(者)矢をさしもぐしを飯りわけ。さぶこのり北(者)戦の中ゐ(ヲ)やさしこのりける事かな」

小松内大臣殿兵を召せとて　源平盛衰記

作者不知武云
葉室時長卿作

内大臣ハ。入道おゐも腹あしく。知人おもはバ院參の事もやあしんぬらんと思しめしけるバ。其の惡行を塞ぎんがためとおぼしくて。主馬判官盛國を使ゐく。重盛おを別しく天下の大事を聞出しくを。我を我と思ふん者ども。急き參せどをしのおさきたりおれをうけたまはるものどもゐ。おほろげゆくを騒き給ふ人のかくる仰の下るをまゐらふ別の子細ゆあるおこそ。難波二郎經遠妹尾太郎兼康筑後守家貞肥後守貞能らを始としく。如法夜中の事おもどと

も我先にとぞ馳せ參りける。かゝりける程に老いたるも若きも止る者はなし。小松殿へとてあせて參りける。入道は何事ぞ世間のそれさわがしさは。はや出る候へやゝとのゝたまひける程にぞ。なを聞のぢりてもせいでけるに西八條の青女房老尼をゝはふでとりてのるぞ殘りける。少しも弓馬のたゝかひする程の者は一人もなかりけ

略下

治承四年五月平等院の戰に足利忠綱

宇治川先陣のこと　源平盛衰記

不知作者或云葉室時長卿作

此の河は浪早しといへども底深しうして岩高しといへども渡瀬多し。河を渡りて岸をおしうする事は鐙ばかりゝゝ。手綱のあやつりはあぶみ馬の足をうぞへて浪間を分けよ者どもとて進む程に然るべきとて伴ふ者ども三百餘騎を伴ひける。足利又太郎眞先かけて下知をなす。此の河も流あゝくして底深し。大事の河ぞあやまちな

肩を並べて手を取組みて戦ふ者をば弓筈
を取つこのせよ強き馬をば上手へ立てよ弱き馬
をば下手を並べよ馬の足は長づかん程は手綱
を緩くして歩ませよ馬は足をばまば手綱をく
せておよがせよ前輪をは多くかゝせ水越さば
馬のさうづを乘りこゝせ水をは多く力を入れ
よ馬をは輕く身をつくべし手綱は實をあゝせ
よさゝむとて引つづくを敵は目をつけよ餘は
仰のき内ゝのぶと射さもを餘はうつぶきくてへ

ん射さもを鎧の袖をまゝのうをあくよ水の
上をを身づくろひすを我が馬弱しとて人は
馬をかゝりて二人をとゞめ押流さるを我等渡
すと見るなりとも敵は矢ぶをまつくりて射ん
ぜゝん敵も射るともおのゝこのへし矢射んと
て河の中にて弓引て推流さるを笑ふを弓
の本筈わゝむすびゝをうちこのけよおまゝが
心をゝつよなしえいおを出して渡を聞かね
よ渡してあやまちをを水は從ひくをゞを已

たりよ渡をべしとて橋より上へ三段むかうちあげく三百餘騎さとうち入をえいくとをゑきさけびて渡したり橋のえとへ一段さがらむ三百餘騎一騎も流さじ皆ぐして（具）おあ（向）ひの岸へさとあがるこをを見て千騎二千騎打入まく渡したり二萬餘騎馬と人とは防をて漏る水おを見えぎりくをみのこら前後北勢ふつくこのずして十騎二十騎渡しける者む一人もなまくび抑流さる大勢河を渡しけ

をバ宮の兵ともおそく平等院ふ引退く足利又太郎ハ西ハ岸ふうちあがりて鎧踏むり弓杖つき物の具ハ水走らり鎧づきす鎧ハ緋をどしふ金物うちいまぐ来の時とを見えく白星のかぶと居頸ふ著ゐ大中黒の二十四さくゑる矢頸高ふ負ひ重藤の弓ハ真中取り紅の（着脱ル）ハ（着）ろけく連錢葦毛の馬ハ太くたくましく知ふ金覆輪の鞍置きてを乗くり〻る平等院の總門ハ前ま打寄て皆紅の扇ふときつのひ鎧踏むり弓杖つ

きて申しはるるハ只今宇治川の先陣渡せるハ昔朱雀院の御宇承平ゐ將門をうちけんしゐう賞預り下野國の住人俵藤太秀郷ゐ五代の苗裔足利太郎俊綱ゐ子ゐ又太郎忠綱生年十七歳童名王法師小事ハ知らぢ大事の軍も三箇度いまゞ不覺仕らぢ略

粟津原の戰源義仲最後北條 源平盛衰記

不知作者或云葉室時長卿作

去年六月ゐ木曾北陸道を上りしまハ五萬餘騎と聞えしゐ今四宮河原を落ちはるるまハたゞハ騎ゐもきぎまくり粟津のをもてのおもえ心ハ猛く思へども運の極の悲しきハ上從二騎ゐなりゐけりまして中有此旅の空獨ゆくある道ゐ迷ゐ思やるまゑ哀をあれ木曾殿鑑蹈をり弓杖突て今井ゐのくまひけるハ日ごろハ何と思も如薄金ゐ今日ハ重く覺ゆる也とのたまへゐ兼平あんでふきる事侍るべき日來ゐ金も增らぢ別ゐ重き物をもつけ

ぞ御年三十七御身盛なり御方ハ勢ひ人をた
臆し給ふハ兼平一人をた餘の者千騎萬騎と
もおそ〳〵ぬ〳〵候ふべし。つひハ死ぬべき物故
よわるを見え給ふ。あのむこひの間ハ見
ゆる。一むらの松ハ下ハ立寄り給ひて心もつ
のハ念佛申して御自害候へ其の程ハ防矢仕
りてやがて御供申さべし。あの松ハ下へハ廻
らむ三町直ハハ一町ハよもすぎ侍らト。急
ぎ給へとおく〳〵涙を押へくとき給ばハ木曾ハ

なごりを惜みて。都ハそいこのみとある歟とのり
つをとどもおくまぐ落來つるを汝と一所ハて死
あんとなり。いのく迄も同じ枕ハ討死せんと思
ふなりとのたまへ。今井いこのハかくハのたま
ふぞ君自害〳〵給ふぐ。兼平則討死あり是をおそ
一所ハて死ぬるとは申せ。兵の剛なるとも申さハ
最後の死を申さあり。きすゞ大將軍の宣旨を蒙
る程ハ人の雜人ハ中ハ打伏せ〳〵を首をとら
さん事。心うかるべし。どく〳〵落給ひく御自害あ

るべしとぞ。ゐ々ゐバ木曾誠ゐと思ひゐろひ
の岡ゐ松をきしと馳行きけり。今井ハ木曾を先
だてゝ引返しゝ命も惜まず戰ひ々ゐ。木曾ハ今
井を振捨てゝ暇る任せて歩ませゆく比も元暦
元年正月廿日の事ゐゐを峯の白雪深くして谷
ゐ水もしけさりゝゐ向の岡へもぢのひゐと志
しつらく結べる田を横ゐうつわぞゐ深田ゐ馬
を馳入ゐさうてとゝゝゆのぞをけり。馬も弱り
ゐも疲れうゝゐをとゝくもゐどゐかひぞゐ

き木曾ハ今井やつゝくと思ひゆゝうしろへ見
返りたるをけるを相模國の住人石田小太郎爲久
ゲ能引て放つ矢ゐ内兜を射させゝ真額を馬の
頭ゐあてゝうつぶしゐ幽しゐ々り爲久ゲ郎等
二人馬より飛でおり深田ゐ入ゐて木曾を引落
しやゝく首狩を取てけり今井是をみて今を最
後の命ゐる急き御供ゐ參らんとゐ進出ゐ申
しゝるゐ日来ゐ音ゐきゝけん今ハ目ゐもみ
よ信濃國の住人中三權守兼遠ゲ四男朝日將軍

の御めのもと。今井四郎兼平あり。鎌倉殿(乳母子)のおぼえ。
ちろしめしたる兼平ぞ。首とりて見給ふいまよ
やとて。數百騎の中をおつかけて。きりまくる戰ひけ
れども。大力比剛の者あり。ゝれば。寄て組む者ハ
あしたゞ開きて。遠矢ふのみぞ射ゝるゞ。ことを
よろひとけをも裏のゝず。あきまを射ぬバ手も
おちぶ兼平ハ。箙ふ殘る八ちおの矢をもて。八騎射
おとしゝる。太刀を拔て申しけるハ。日本一の剛
者の。主人ハ御供ふ自害をも見なしへぞ。東ハ

箙(やなぐひ)ハ。弓朝ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ。ゆ。

○トモリノ子トモマタラナリ

○耳矢ヲ射リ二時間ナリ

○知ヲ知ルトハウタヤウトヨミタフ

○知ハイヤトトヨミタフ

○兄ハヤハヤトヨミタフ

○ヒトリヤハキヲカワトヨミタフ

○ヤマハトヤヤワトヨミタフ

将として御座しける。敵内ゐ入ると見給ひて、二千餘騎を差向けて、梶原が五百餘騎を中ゐ取まめて、餘すゐ漏さゐと一時もこのりで戰ひける。いづれも互ゐひろぎりるるがはもとの無勢なれば、梶原「下手ゐ廻て、颯と引てぞ出たりける。源太もいこのゐと問へた御方を離さて敵ゐ中ゐ取まめ〜れ給ひぬとめふあゐ心うやさくハ討ぬるゐや景時生きて何ハせん景季が敵ゐ組で死ぬんとて、二百餘騎を相具して平家の大勢へけ散〜て内ゐ入り、聲をあげて相模國ゐ住人鎌倉權五郎平景政が末葉梶原平三景時ぞ彼の景政と八幡殿の一ゐ郎等奥州合戰の時右ゐ目射られ給へども其の矢を抜りぞ〜く當ゐ矢ぞ射返して敵を討ち名を後代ゐ留めしと末葉ゐ聞バ一人當千のつわものぞ子息景季がゆくへゐかつのなくて返し入給り我と思もん大將も侍も組めや〜と名のりこのけく響戈比べく責入ゐ給ぞ名ゐやまこと恐ぢけん左右へさとぞ引退く。

○八幡ハ八幡大郎義家ヲイフ

○當ゐ矢ハ矢ニテ返報スルヲ明ラ返ヲ矢ハ

源太尋ねよとて責入り見るに景季いまだ討たれざりしかば菊池の者どもと射合ひけるが後ハ太刀を抜合せて名のりけるわぎとも誰ぞ菊池三郎高望ぞ見るぎみハ誰ぞ梶原源太景季と名對面して切合ひしが源太ハかぶとをうち落さるおのわれとをのく三十餘騎ハ取籠めらるるに切合ひけるが菊池三郎ハ押並べて引組て馬の際ハ落重りて菊池が頸をとり太刀の切鋒ハ三つ貫きて馬ハ乘出でけるが父の梶原ハ行合ひた

平三景時源太をうしろあわなして矢ぶすまを進む御戰ひ盛り其の間ハ源太ハ錯きせもぼ〜やもめく寄せの返しの戰ひけるに城戸口ハ眞鍋四郎五郎と名乘て出合ひけるが四郎ハ梶原ハうつぶせぬ五郎ハ手負ひて引退く平家の兵ども入替く戰ひけるに景時ハ源太が死ぬ嬉しさハ猛く勇みく竪さま横ぜる戰ひ盛り息をもつぎ〜もて父子相具して引て城戸へぞ引退くぞ

けゝえいもをけれ　詩歌管絃ハ公家仙洞の嗜を東夷いこのぐゝ敷島難波津のことむを存ぜべきおもとゝ梶原ハ心ハ剛も人ゐ勝をき花る道も優あり万咲きみぐをたる梅が枝をやなぐひま添へぞ〜〜〜

お討きたりけるきそハ勝軍をバ去なすゝら官軍
京をを引たりけるいゞくゝ其の首どものあるら
ん取て獄門ゐかけ大井川を渡せとて敵御方
北戸骸どもの中を求めきせけれども是こそと
おぼし知首るなりけ餘ゐあとまぶしきゐ
爰ゑ面影の似たりける首二獄門の木ゐかけを
新田左兵衛督義貞楠河内判官正成と書附をせ
ゐきたりけるをいこのあるゐくきうゐ者ゐ為た
まうもん其の札れ側ゐ是ハ新田左兵衛督義貞ゐ首ありまさとげ

おも書るをゝゝとの名と秀句をしくゞ書副へ
て見せたりけるゝ又同日の夜半をゝりゐ楠判官
下部どもゑゐ松明を二三千燃しゐきさせ小原
鞍馬の方へゞ下しけるゝ京中の輩ども是を見て
すハや山門の敵どもゐそ大将を討きて今夜方
々へ落ち行きゐゑ候へと申しけきバ将軍もげ
ゐゑとゐ思ひ給ひけんきゝバおゐきゐ様ゐ方
々へ勢をきゝわけゝきく鞍馬路へと三千餘騎
小原口へ五千餘騎勢多へ一萬餘騎宇治へ三千

餘騎嵯峨仁和寺の方すぐ洩さぬ樣ゑ固めよと
て千騎二千騎差分けて勢を置きぐる方もあこの
ほかりさそあそ京中の大勢大半減じく殘る兵
も徒ゑ用心するハなりりれはるわぐる官軍
宵より西坂をあり下て八瀬數里鷺森下於ゑ陣
ぬとゑ諸大將ハ皆一手ゑありそ二十九日卯刻
ゑ二條河原へ押寄せて在々處々ゑ火をかけ三
所ゑ關をぞあげたりける京中の勢ハ大勢なり
時をあるこのるもぐ引一軍ありまして勢をバ

○青ヨリ上夜ヘ
○爰ト云歟少世ヨリ
○三日仰剃ト差置
時與ヲ云ヲ

大畧方々へ分遣もさぬ敵寄せ來ると夢ゑ
も知らぬ事ゑ也バ俄ゑあわてゑるとをきて或ハ
丹波路をさして落くゑあり或ハ山崎を志して
逃ぐるもあり心を發らぬ出家して禪律の僧ゑ
あるとあり官軍ハさまで遠く追ばりるを跡
ゑ引く御方を追懸くる敵ぞと心得て久我畷桂
川邊ゑハ自害をしたる者も數をしらぬどよりり
ける況んや馬物の具を棄てゑるまとハ足の蹈
所もなりりなを將軍ハ其の日丹波北篠村を通

○あわてふためきて
○禪律ト云ハ宛ヘセヲ
ヲ即チ心ヲヒラケ
○禪律ト云ハ禪宗律宗
ヲ云フ
○御具ヲ武具ト云フ

り曾地の内藤三郎左衛門入道道勝ガ館ヲ著給
ヘバ四國西國の勢ハ山崎を過きて芥川ヲぞつ
きまゐる親子兄弟骨肉主從互ヲ行方をしらぬ
落ち行ぬるをバ討れぬる者をも生きてぞある
らんと憑みいきたる者をも討をぞ死しつら
んと悲む下略

延元元年五月湊川合戰ノ條 大平記

北小路玄慧等作

楠既ヲ討をヲけをバ將軍と左馬頭と一處ニ合
ひく新田左中將ヲ打ちく懸り給ふ義貞こをを
見て西宮よりまゐる敵ハ旗の紋を見るに木々
ヒ朝敵どもなり湊川より懸る勢ハ尊氏直義と
覺る是こそ願ふ所の敵なりとて西宮より取て
返し生田森を後ヲ當て四萬餘騎を三手ヲ分け
て敵を三方ゐぞ受られけるいるほどヲ兩陣互
ヲ勢を振ひく鬨を作り聲を合をすづ一番ヲ大
館左馬助氏明江田兵部大輔行義三千餘騎ヲて
仁木細川ガ六萬よきヲ懸合て火を散して相戰

ふ其の勢互ゐ討さく兩方へ颯と引きのけバ二番ゐ中院中將定平大江田里見鳥山五千よきまて高上杉ゲ八萬騎ゐ懸合て半時ばかり黑烟を立てゝ揉合ひたり其の勢共ゐ戰疲さて兩方へ颯と引きのけバ三番ゐ脇屋右衛門佐宇都宮治部太輔菊池次郎河野土居得能一萬騎ゐを左馬頭吉良石堂ゲ十萬よきまを懸合せ天を響し地を動して攻戰ふ或ハ引組て落重りて首をとるあり或ハ打違へて同じく馬より落るもあり兩虎二龍の鬪ふ何も討ゝ者多このをけさを兩方東西へ引のゝく人馬の息をゝ休めける新田左中將是を見給ひて新手の兵既よつきて戰いまゝ決せぬよさ義貞ゝ自當るべき處なりとて二萬三千よき殘左右ゐをたゝ將軍れ三十萬騎ゐ懸合せ兵刃を交へて命を鴻毛よりも輕くせり官軍の總大將と武家の上將軍と互ゐのゝ戰ふ軍なさバ射落きるさとゝ矢をぬくゝゐ隙あく組て下るゝれとも落合て助くる

者ども只子ハ親を忘れ切合ひ郎等ハ主ヲ離
きて戰へバ馬ハ馳違ふ聲太刀の鐔音いかなる
修羅の闘諍とうしかうるは是ハ世ハすきに成ぬ一先ず
ゐと軍して引きあさるる兩方の勢ともに今ハ
いのちを期を惜きあまた四隊ハ陣一處ヲ舉り
て敵と敵と相交る中黑の旗と二ツ引両と巴ハ旗
と輪違と東へ靡き西へ靡き磯山嵐ヲ翻翻して
入違ひたるものゝふくいつまを御方の勢とも
見えもこの比新田足利ハ國の爭今を限とぞ見え

たりける官軍ハ元來小勢なれバ命を輕くして
戰ふと雖遂ハ大敵ヲ懸負て殘る勢僅五千餘
騎生田森の東より丹波路をさしてぞ落行きけ
る數萬の敵勝ほのりて是を追ふ事甚急なりさ
まどもいのちのなごりなれバ義貞朝臣御方ハ
軍勢を落ち延びさせん爲ヨ後陣ヨ引きさがう
をかへしあひ戰ふるほどヲ義貞の乘られ
たる馬ヲ矢七筋すぐ立ちるるあひだ小膝
突折りて倒ふるるとうし義貞求塚の上ヨありたち

て乘昏の馬をゆち給へとも。あへて御方是を去らざりけるあや。下りて乘せんとする人なりけるを。敵や是を見知りたりけん。そのあとを取籠めて。是を討たんとしけるが。其の勢ふ辟易して。近くハよらずふらざるを。遠ども十方より遠矢を射ける矢雨や霰のふるよりも猶繁し。義貞ハ薄金といふ鎧ふ鬼切鬼丸とて。多田滿仲より傳りたる。源氏重代の太刀を二振たゝれたりける。左右ゆ手ふ抜き持ちて。さゝるる矢をハ飛越え上

○りるまやゝゝかゝ
綱ヨト

○せんと前を既ト

○義貞ハ
即ナリ

○逢坂ト
モツカヒ

○さゝるる矢ハ
ヲ

る矢をもさゝうつふた眞中をさゝく射る矢をも二振の太刀を相交へて十六まぐを切て落さ遂ゝ逃ゝ

○さしうつふた
カヲ

○さゝ
ヲ

○諸鐙を合せて
ヲ

中略

小山田太郎高家遥の山ゆう人より是を見て諸鐙を合せて馳參り己ゝ馬ふ義貞にの世奉りて我ゝ身ハ徒立ふなりて追懸くる敵を禦ぎけるゝ敵あまたふ取籠めゝ遂ふ討ま

ふゝ。そのあひだ義貞朝臣御方の勢ハ中へ馳入りて虎口ふ害を遁れたす。

和文讀本卷一終

明治十五年十一月十三日板權免許
同　年十二月　出版　定價貳拾錢
同　十八年八月十八日再版御届

埼玉縣士族
編輯出版
稲垣千穎
東京下谷區仲徒町三丁目七番地

賣捌
普及舍
同下谷區練塀町十四番地

文堂
同日本橋區長谷町六番地